

Title	高垣商学士著 銀行集中論
Sub Title	
Author	片桐
Publisher	三田学会
Publication year	1914
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.8, No.5 (1914. 6) ,p.621(115)- 622(116)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19140601-0116

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

のにして、其内容豊富、殊に露國に關する部分に本著の特色として認む可きもの多し、而して本著は紙數の約三分の二を國民經濟に、三分の一を財政學に費し、卷頭先づ吾人の經濟行爲の基礎を以て吾人の生存上の慾望に基くとなし、次で個人、家族等に關する私經濟組織と共同經濟が進んで國民經濟及世界經濟となる所以を明かにし、就中、國民經濟の階段を敘述せる際、商工業の見る可きものなき農業的國家の狀態にある露國の發展を明かにせり、又、生産篇に於て露國の現状を論せり、即ち露國本土に於ける土地の五分の一は何等價值なき部分にして、炭田と鑛山とは共に地理上極めて不適當なる地位にあり、何んとなれば此兩者は露國に於ける主要なる工業地たる「モスカウ」及「ウラヂミル」兩州を去ること遠く、「ペテルスブルグ」と「リガ」の工場は止むなく外國炭を輸入せり、又、「ウラル」の豊富なる鑛山は其附近に炭田を有せざる

結果、採鑛上、木炭を使用せり、更に進んで、伯は勞力と人口問題とを罔聯して説明し、其間生産的職業に全人口の約五分の四を有する佛蘭西及普魯西の如き國家を稱揚せり、尙ほ人口移動の現象を説明せる中に、露國の生産率の多きことを論せり、即ち西部歐洲の諸國中、生産率にて最も多きは獨逸及奧太利の三十二人乃至三十六人(人口千人に就き)にして、露國は之れに對して、四十四人半以上の數を現せり、となせり、尙ほ伯は内國産業の極端なる保護論者にして、之れを證明する爲め、彼は歴山三世の工業及商業政策が著しく露國の産業を發達せしめしことを以てせり、而して工業の發達につれて當然發生する勞働者問題に就きては、彼は熱心に國家の保護干渉を主張せり、次ぎに貨幣、銀行及信用制度に關しては國民經濟篇の約四分の一以上に亙り、極めて透徹的に説明し、其間、露國有數の財政通たる伯の面目を躍如たらしめ

り、尙ほ國民經濟篇最後の部分に於て所得問題を經濟上殊に社會政策上より論究し、轉じて財政篇にては財政組織、豫算、其歴史等を説明し、殊に國家收入の部に於て露國に於ける諸税及手数料等を最も明白に説明し、更に市町村自治體の組織及其財政狀態を敘述するによりて、本著を終れり、我等は實に本書によりて露國を近世化したる伯「ウイッテ」の精力と達見とを窺ふを得可し。(阿部生)

石原醫學士著「女工之現況」

國家醫學會發行

著書が我邦に於ける各工場的女工を精査研究せし結果によれば、未成年女工は女工總員の六割強に當り、又、女工の勤續年月は比較的短く、二箇年以上勤續せるものは僅かに總員の三割位にして、次ぎに工場在籍中の死亡率は一千人に對し八人内外、而して其過半数は結核性なり、

加ふるに疾病未治なる故を以て解雇されたるもの、過半も同病患者なりとす、而して著書が得たる結論にして、最も重要な點は(一)本邦婦女子にして工業に従事せし者は従事せざるものに比し、多數の死亡者を發生し、併せて結核性疾患及脚氣の割合増進せるは疑ふ可からざる事實なること(二)本邦工業の經營狀態は従業者の健康を一般に比し劣悪ならしめつゝある明瞭なる事實ある事なりとす、想ふに此著は衛生上の見地より見たるものなるも、我邦に於ける社會問題の研究に従事する士にとりては、其間幾多の參考材料となるもの少からざる可し。我等は著者の調査研究を多とするもの也。(阿部生)

高垣寅次郎著 銀行集中論

大正三年一月東京銀行集會所發行
菊版一九五頁 定價 金六十錢

本書は高垣氏が東京高等商業學校專攻部銀行科に提出したる卒業論文にして、同科擔任佐野博士が審査せられたるものなり。

其所論正確引證亦該博にして誠に好箇の卒業論文たると共に、同氏が著述として其要を得たるものなり。されば單に一編の卒業論文として葬り去るは惜むべきものとなし、一度銀行通信録に掲載せられしが其後別冊として、刊行せられたるものなり。

第一章緒論に於て、銀行集中論研究の必要より筆を起し、其範圍及び心理的基礎を論述し、第二章に於ては、銀行集中の原因に説き及ぼし、是が原因をば、一般的原因及び特別的原因の兩者に別ちて該博なる研究を遂ぐ。凡そ一箇の社會現象を取りて、之が發達の原因を探究するは、甚だ難事に屬す。畢竟是れ幾多粉糾せる社會事情の錯雜混交せるに由るものにして銀行集中の原因を究むる者甚だ少なく、紹介者の知る限りに於ては僅に十指を屈するに過ぎず。之が研究は興味ある問題なり。第三章（銀行集中の形式並に其特質）第一節に於て直接的集中法を、第二節に於て、間接的集中法を論じ、精密なる研究を遂げたり。次に第四章及第五章に於て、銀行集中の私經濟的結果並に國民經濟的結果を論述し、最後の第六章緒論に於て銀行集中の將來なる題目の下に地方銀行の運命並に銀行集中に對する政策を論述し終りに我國に於ける銀行集中運動の大勢に論及せり。

今日歐米先進諸國に於て、銀行集中運動の行はるゝは普遍的の現象にして、各國皆な其經濟事情を異にし、政治的性情を異にし其間に多少の相異なるにも拘はらず、一般的事實として現はるゝは其間何等かの共通的原則の行はるゝにあらざるなきか。

佐野博士は之を以て資本制經濟組織の必然の産兒となせり。著者は此點に著目して綿密周到なる研鑽を遂げたるものなり。本書の如きは、氏の初女作として單に論文の典型たるのみならず、又貨幣銀行研究者の一讀に價ひする著述たるを失はず、必ずや銀行科專攻の士並に後進者を益すべきものあると同時に我國現今の幼稚なる銀行業の將來に於ける大勢を窺ふに好箇の材料を供給するものと信ず。敢て茲に紹介を爲す。（片桐）

○ 廣 告

● 理財學會會報

● マククラレン教授並卒業幹事送別會 既往六星霜の間本學大學部教授として經濟史、經濟學史、憲法史の諸學科を擔任せられ學々として倦まざりしマククラレン教授は四月中旬に故郷加奈太に歸國せらるゝことなりしを以て本理財學會は本年卒業せらる可き本會の幹事の送別を兼ねて二月十三日午後六時より宴を三田東洋軒の樓上に開催す、來り會する者二十有四名頗る盛會を極む會食の後在校幹事の送別の辭卒業幹事の答辭ありてよりマククラレン教授は其の得意の雄辯を弄して過去六年間に於ける感想を述べらるゝこと幾々數千言、一語は一語より急に聽く者をして轉た感慨無量たらしむ、次に鎌田塾長は卒業幹事に對し卒業後の訓戒を與へられ石田本塾幹事、阿部教授の訓

話ありて喜々満々の裡に散會す時に午後十一時半。

● ブカナン教授並新任幹事歡迎會

四日マククラレン氏本學大學部教授の職を辭して歸國せらるゝや其の後任者としてブカナン教授の來塾あり旁々本會幹事として新に就任せられたる人々ありしを以て茲に本理財學會は五月一日歡迎會を三田東洋軒の樓上に開催す來會者は主客ブカナン教授並に新任幹事藤崎、吉村、木谷、木暮の四君を始めとし來賓には氣賀教授、石田本塾幹事、高城教授、レー教授、増井教授及向井塾員の外本會幹事等總て二十有二名なり、宴酬なるに及んで本會幹事齋藤氏は立ち其流暢なる英語を以てブカナン教授歡迎の辭を述べ曰く、「ブカナン氏今や萬里の波濤を越えて氣候、風俗、習慣、言語等察つて異らざるなき東洋の一小島國に來る、斯くの如きは元より人々の以て困難苦痛となす處、而も先生之を意とせず喜び來つて我が慶應義塾に教授たらんとす、吾人はブカナン教授の熱心と、勞苦とを多とせざるを得ざるなり、抑も我が帝國の國を開くや其の先導者たり、指導者たりしものは疑もなく米國なり、先生今や來りて其の祖先の曾て開きし國の青年を黨陶せんとす、また多少の意なからずして可なむ哉、然れども教育の事業たる其の效果の直ちに現るゝものにあらずして、二十年三十年の長年月を待て始めて其の實を結ぶものなり、之を願ふれば教育の事業たるや恰も植林事業の如しと謂ふを得ん哉、吾人は今日に於て先生の我が塾生に及ぼす効果の必ず將來に於

て現るゝことあるを疑はざる者なり」と齋藤氏の著席するや次でブカナン教授は、今夕殊更に余の爲めに此の盛大なる歡迎會を開かるゝは喜びに耐へざる次第なりと云ふを冒頭に「新日本の建設者として日本文明の發達に寄與する所少からざりし故福澤先生の創設に係る此の慶應義塾に來りて教授たるの椅子を占むるは余の最も光榮とする所なり」と幾々二十分に亘りて答辭を述べらるゝ次にレー教授は齋藤氏の言に對し述べて曰く「齋藤氏は日本の開國者は米國なりと云ふも余を以て述べしむれば是は米國に非ずして却つて日本國自身なりと謂はざるを得ず」とて一七五〇年より一八五五年に亘る百年間は日本に多くの英雄偉人を産みたる時代にして此等の人々は多く蘭書を通じて泰西の文明を吸收し更に後年英書によりて益々其の世界的知識を涵養したり此の當時に於ける日本の状態をものに喩へばこれを將に開かんとする花の如しと謂ふを得んか事情斯くの如き次第故米國が日本を開きしと謂ふは誤りにて日本が將に開國せんとする丁度其の時に米國が日本を訪れしに過ぎず故に日本は自身其の鎖國を撤して開國せしにて開國の効は日本にあり米國にあらずと論じ花を我が國に持たしめて著席するや氣賀教授は簡單にブカナン教授に歡迎の辭を呈し更らにレー教授の演説を謝して復席す、次で本會幹事千金真君は新任幹事の歡迎の辭を述べらるゝ次に新任幹事の答辭ありて最後に石田本塾幹事は立ちブカナン教授來塾の經過に付き簡單に説明を與へ更に語を轉じて